

気温と湿度の上昇とともに草木が青々としてきました。今月号の表紙は安次嶺 馨先生の“平和記念公園資料館”です。亡くなられた御霊のご冥福を祈るとともに平和が続くよう願っています。

さて、今月号には多くの報告が掲載されています。まず第186回沖縄県医師会定例代議員会では宮城会長の所信挨拶があり、2期目にあたったの決意を述べられています。会員が力を合わせて会長、執行部を支えて医療改革を進めたいものです。

沖縄県福祉保健部との連絡会議では離島医療を支えるドクター・ヘリ事業の報告が掲載されています。平成20年度から救急医療用ヘリコプター活用事業が予算化されたことをご存じでしょうか。県の考えでは南北大東と夜間搬送は現状のヘリ添乗（ヘリコプター等添乗医師等確保事業）で、昼間は救急医療用ヘリコプター活用事業で対応（浦添総合病院）するようです。安里常任理事は地域性を考え北部地区医師会病院も救急医療用ヘリコプター活用事業の対象になるように要望されていますが、前途は厳しいようです。医学研究費でも同じですが、ヒモ付きでなく実際に利用する側の立場で運用しなければ、有効活用が難しいと思われます。また現状のヘリ添乗事業では安全性・補償問題、人的資源不足などから今年度から琉球大学と那覇市立病院が撤退しました。新しい救急医療用ヘリコプター活用事業とうまくすりあわせて県民の医療環境改善を図っていただきたいと思います。

年度が代わり新たな制度がスタートしました。後期高齢者医療制度、特定健診・特定保健指導は国民、医療現場で十分な周知・システム構築がなされないまま導入され、案の定多くの制度上の欠点、矛盾が表面化しています。後期高齢者医療制度は内容の変更が早期に行われるような報道もなされています。本制度について本誌でも積極的にとりあげていく方針を広報委員会で確認しておりますので会員各位のご意見をお願いいたします。特定健診について、マスコミとの懇談会報告には興味ある意見がみられま

す。本健診の目的は医療費削減ですが、この健診を行った場合医療費下げるというエビデンスが全くないことです。厚生労働省に振り回されているように感じますが、沖縄県では健診受診率が低いので特定健診が導入されたことを契機として成人病の早期発見・治療への意識が高まってくれればと思います。実際の運用では地区により異なりがあるようですが、後期高齢者医療制度とともに本誌では取り上げる予定です。

新臨床研修制度が始まって5年になります。本号には県内3つの新臨床研修制度（琉球大学RyuMIC、群星沖縄、那覇市立病院）の様子が掲載されています。いずれの施設でも工夫を凝らし次世代の医師を育てるために健闘しています。フレッシュマンが来ると指導医も不思議と元気がわいてくるものです。医療現場に大きな波紋をもたらしている現制度ですが、新人諸君が志高く成長してくれることを祈っています。

生涯教育コーナーは琉球大学の崎間 敦先生に血圧コントロールが十分でない患者さんへの対応について簡潔にわかりやすく教えていただきました。是非ご一読ください。プライマリ・ケアコーナーでは水虫について南部徳洲会病院の富永 智先生に教えていただきました。水虫は皮膚科で症例が多い疾患の一つですが本文を読むと奥が深いものだと思えて感心いたしました。

インタビューコーナーは沖縄県立南部医療センター・こども医療センター院長に就任された下地武義先生です。県立病院の赤字体質、DPC導入、看護職の離職者が多いこと、など多くの問題がありますが、地域の拠点病院としてさらに発展させていただけるように期待しております。リレー随筆は照屋寛先生から、随筆は3つ投稿を頂きました。

6月8日に宮城征四郎先生を会頭として第106回沖縄県医師会医学会総会が県立浦添看護学校で開催されます。会員各位が多数参加され活発な議論が行われることを期待して稿を終わります。

広報委員 鈴木幹男